
あ、自分ちーとっす。

あれ？なんかオカシイかも？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あ、自分ちーとつす。

【Nコード】

N3201S

【作者名】

あれ？なんかオカシイカモ？

【あらすじ】

何か知らんけど自分ちーとつす。家族は一般家庭で見かける程度の一流暗殺者で友人は正義のヒーロー気取りの馬鹿野郎が1人と変才的ハツカーの少女が1名います。そんな自分らがおりなすちーとでチートな非日常的日常生活。
君らも自分らの仲間になりやすか…？

あ、自分にちじょうつす。(前書き)

衝動的論理性に任せて作ってみました…はい。ウソです。なんかゴメンね？

あ、自分にちじょうつす。

「ふぁ…眠たいっす」

朝を迎えた自分は眼を擦りながら呟く。

その時飛んできたナイフを指で挟み捕らえ次に飛んでくるに向けて投げる。

金属同士がぶつかる甲高い音がすると同時にベットから降りて本棚に向かう。

後ろでドスツと鈍い音がしたが、どうせ鈍器でも落ちたのだろうと考え気にせず本棚から本を2冊取り出す。と同時にまたも飛来してくるナイフを1冊の本を盾にしてやり過ごし部屋から出て行く。その時、扉の上から落ちてきた斧を片手で白刃取りして近くに投げる。

「おっはよ〜 和真、ご飯にする？お風呂にする？それとも…わた「おはようっす。当然ながら朝ごはんっすよ」「…ちえっ、しようがないなあ。じゃあその椅子に座っててね？」

朝からとても鬱陶しい母の言葉を華麗にスルーして椅子に座る。

「…おはようございます。調子はどうですか？」

「いつも通りっす。父さんこそ大丈夫なんすか？」

父は吐血しながら微笑み大丈夫と言葉にする。

自分は吐血した父に薬を渡し机に吐き出された血をティッシュで拭き取る。

「はい、お母さん特製の猛毒入りオムライスです！どう？おいし

い？」

「ありがとっす。もぐもぐ…うん、いつも通り毒の酸味が効いててうまいっす」

ありがと〜！とハイテンションになっている母を傍にオムライスを食べ終え、学校に行く準備をする。

「…お前に私を越えられるか？」

「ん？姉さんっすか、おはようっす。自分遅刻しそうなので退いてくれますか？」

「ハッ！ここを行きたくば暗黒の紋章を「すみませんっす」ぶげら！？」

なんか言ってる姉の顔面に飛び蹴りを放ち吹き飛ばす。あ、丁度姉が扉に当たった衝撃で扉が開いたっすね。感謝するっすよ、姉さん。

「あ、そうそう。そろそろいい歳なんだから厨二病を直した方がいいっすよ」

「フツ…私に釣り合う男がこの世にいるかな…」

「…多分色々な意味でいないと思うっす」

姉の戯言にツツコミながら携帯を開く。

8:50

…やば、あと10分っす。

時間を確認して自分の自転車に跨り鞆を肩に掛ける。

「しょうがないっす。今日は2割の力で行くしかないっすね」

眩くと同時に2割の力でペダルを踏み込んだ
瞬間、初動から時
速200キロの自転車は街を駆けだした。

* * *

「ふいー着いたっす」

ドサツと自分の勉強机に鞆を置く。
すると前から友人が声を掛けてきた。

「よお、今日も今日とていい人助け日和だよな！」

「そっすね…今朝はどれだけ人助けしたんすか？」

「んん？今朝は確か30人だ。今日のノルマは100人だ！」

「あー、そっすすか。頑張ってくださいっす」

朝から正義気取りのこの馬鹿を相手にしつつ椅子に座り鞆から勉強
道具を机の中に入れていく。

「…和真。今日のニュース見た？」

「ん？いや、見てないっすけど…またなんかやったんすか？」

パソコン片手に声を掛けてきた友人である少女に声を返すと片手で
持っていたパソコンを机に置き画面をこちらに向けてきた。

「…見ろって事っすか？」

「……………」

一応確認を取ると無言で頷かれた。

溜息を吐きつつ画面を見ると動画が再生される。

【今日の一面！なんと大物政治家と新人アイドルによる長期間の不倫が発覚しました！！なお、このスキャンダルを提供した人物によると大物政治家の家に新人アイドルが入るところを目撃したとの情報】

「……………」

「……………」

「……どっ……」

「いや、どっって言われても」

間違いなくこの友人が提供したんでしょうけど……一体どうやったんすかね？いや、いつものハッキングっすか。

「……………褒めて」

「……………褒められた行為じゃないっすけど、頑張ったっすね」

「……えへへ」

「……………はあ」

頭を撫でられて嬉しそうな少女から視線を外してため息を吐く。

……自分の周りには変人ばかりっすね。いや、今更か。

思考を中断させ、またため息を吐く。

「……とりあえず、今日も頑張るっすね」

自分は窓の風景を見てそう呟いた。

あ、自分えすけーぶっす。

「おーし、お前ら今から抜き打ちテストやるからな!!」

『ええええええ!?!』

科学の先生による抜き打ちテストだ!発言にクラスの皆は驚きブーイングをかます。

「おーし、今ブーイングした奴には心優しい俺が課題を上げよう。ちなみにその「よっブサメン!」「カッコいいっす先生!だからそしてテストなんか出さんじゃねえ!!」って言った奴ら、お前らは今日補習な」

『な、なんでっすか!?!』

「逆に驚いてるお前らに驚くわ!たく…あ、あとそのパソコン開いてる奴。一週間没収な」

「……ッ!?!」

「いや、だから何で驚いてんの?馬鹿なの?死ぬの?」

『お前が死ぬ!!』

「よーし、テメエら上等だ!全員ぶちのめしてやる!!」

…なんすかこの授業。

「……和真脱出」

「…脱出っエスケープて授業放棄っすか?」

「…そうともいっ」

「いや、そうとしか言わないっすよ」

隣でパソコンを閉じた友人が声を掛けてきたのでそう返答する。
一度断るうとしてふと周りを見渡す。

「テメエら俺を舐めてんのか!」

『舐めまくりじゃボケエ!』

「んだとゴリア! テメエらやっぱぶちのめす!」

『やってみるやゴリア!』

…うん。自分は何も見えてないし聞いて無いっすよ。

「…行くっすね」

「……ん」

「なあ、それ俺もいいか?」

先程まで寝ていた正義馬鹿が声を掛けて来るのであからさまにため息を吐く。

「…しょうがないっすね」

「……死ねばいい」

「なんで!?!」

とりあえず自分らは戦闘になりかけている授業から抜け出した。

* * *

「くぁー!! やっぱ屋上は最高だな!!」

「そつつすねー、風が気持ちいい」

「……………」

授業を抜け出した自分らは授業中絶対に人が来ない場所として屋上

を選んだ。

結果は語るまでも無く大正解。正義馬鹿と自分は精一杯伸びをして体をほぐす。

ハッカー少女は…うん。相変わらずパソコンを触ってるっす。

「…ん？」

「…どうかしたっすか？」

「いや、あれは…」

「…なんすかね？」

屋上の手摺から身を乗り出し体育館の裏を眺める正義馬鹿を見て同じように手摺から身を乗り出し体育館の裏を見る。

「…恐喝…っばいすね」

「……………」

「…あれ？どうしたっすか？」

「…るせん」

「…はい？」

「ゆるせんぞおー!!」

「あ、ちょ！待つつす！ここは5階っすよ!?!」

「はーなーせー!!」

体育館の裏で恐喝らしき姿を目撃した正義馬鹿が手摺を乗り出そうとしているのを必死に止める。

「ちょ、雪！コイツを止めるっすよ!?!」

「……………なんで？」

「いや、なんでっす…あっ!?!」

「待ってるよおおお!?!」

「大和お!?!」

雪に助けを求めるが失敗。しかも大和を捕らえていた手を離してしまいい大和は5階から飛び降りた。

「…これで邪魔者は消えた」

「いや、そんな場合じゃないっすよ！しょうがない、雪捕まってく
ださいっす」

「…痛い」

パソコンを閉じて自分の方に擦り寄ってきた雪にチョップを繰りだしししゃがむ。

すると頭を擦りながら自分の背に乗った雪を確認し手摺に足を掛け跳躍する。

【電光石火】

自分の体を操り電気を足に集め高速で壁を走る。

そして3階くらいで大和の手を捕らえ、そのまま壁を蹴り地面に着地する。

「…ふう、危なかったっす」

「相変わらず規格外なこった…」

「いや、躊躇い無く屋上から跳びだす大和に言われたくないっす」

「…2人共、前」

溜息を吐きながら大和にツッコむと雪が一步下って注意してくる。気付くと恐喝犯っぽい奴らが5人此方に向かってくる。

「…どうするっすか？」

「じゃあ、お前に2人やるよ」

「しょうがないっすね…んじゃ、先手必勝っす」

そういうと同時に駆け出し、近くにいた1人に跳び蹴りを放ち吹き飛ばす。

突然仲間が倒れた事に驚いて硬直した不良Bに一瞬で近づき回し蹴りを放ち倒す。

「な、なにすんじゃあ!」

「うっせえ! テメエらは俺がぶっ飛ばす!」

不良Bが倒された事に激怒し襲い掛かってくるのを大和は拳で殴る。そうして闘うこと数分、立っているのが自分らになり地面に這いつくばっている不良を一瞥し恐喝されていた少年に歩いていく大和を眺める。

「お前、大丈夫か?」

「…うえ!?! は、はい!」

「うむうむ…大丈夫そうだな」

少年の言葉に頷き制服の汚れなどを払い頷く。

すると少年は何度か宙に視線を彷徨し意を決した様に大和を見る。

「あ、あの…どうして助けてくれたんですか?」

「ん? 困ってる奴を助けるのは普通だろ?」

「…ほえ?」

「まあ、そんな事よりも…もう不良達に捕まんよ?」

そう言って笑顔を見せ此方に戻ってくる大和に声を掛ける。

「お疲れ様っす。フラグ王」

「…お疲れフラグ王」

「なんだ、その悪意に満ちた名前は…」

げんなりした様子を見せる大和に後ろを指差す。

大和は後ろを振り返り、直ぐにコツチに視線を戻す。

「…いや、うん。それは無いわ…」

「いやいや、現実を見るっすよフラグ王。たとえ男子であろうとフラグを立てるその姿…流石っすね！」

「だから立ててねえって!!」

「…じゃあ後ろ向くべき」

「だが断る!!」

後ろで熱い視線を送ってくる男子から背を向け走りだした大和に苦笑しながらついて行く。

今日も今日とて平和つす…。

あ、自分ぶーるびらきつす。

「キヤツホーイー!!」

…今日の教室入って聞こえた第一声がこれっすか。

「あ、ちよ！和真クンどこ行くだぜ？」

「いや、なんかキモい幻聴が聞こえたんで帰ろうかと…てかなんすか？そのテンション…正直ウザいつすよ」

「開口一番酷くね！？まあ、俺は気にしないね！テンション？何それ、おいしいの？」

「すみません。やっぱり帰るっすわ」

踵を返して帰ろうとする自分の足を掴んで阻害してくる正義馬鹿に嫌そうな顔で見る。

「いや、そんな露骨に嫌そうな顔しなくても…ま、そんなのは置いて。ユー、席座っちゃいなよ。ユー」

「すみません、離してくれます？キモいつすから」

「いや、マジゴメンって！だから虫けらを見る目で俺を見ないで！」

漸く手を離れた正義馬鹿を一瞥して自分の席に鞆せしめを置いて座る。

「…おはよう」

「ん？雪っすか。おはようっす」

「うわぁ…雪だけ笑顔で挨拶とか、俺の扱いと全然違っし」

いや、当たり前っすよ。誰が好き好んで暑苦しい奴に笑顔で挨拶す

るんすか。

「ところで、和真くん。今日は何の日か知ってるかね？」

「…何の日？今日は通常授業な筈っすよね？」

「…今日からプール開き」

「…マジっすか？」

コクリと頷く友人2人に頭を抱える自分。

「なあ…まさか用意忘れた…？」

「…そのまさかつす」

「…」

自分の返答に呆れた様な目線を寄越す正義馬鹿。クツ！正義馬鹿に呆れられるなんて人生最大の屈辱っす！！

悔しがるように拳を握りしめている自分に雪は雪の鞆を持ってくる。

「…なんすか？」

「…水着貸す」

「…いや、自分は男っすよ」

「…知ってる」

そう言っつて雪は鞆から1つの袋を取り出し自分に袋を渡してくる。

自分は疑問符を頭に浮かべ袋を開ける。そして固まった。

「…雪？」

「…なに？」

「1つ聞きたいんすけど…これ、自分の水着っすよね？」

「…うん」

「…なんで、持ってんすか？」

「…今日和真が忘れる事分ってた」

いや、何で知ってんすか？まあでも、一応これでプール対策は解決すね。

「…いや、それでいいのか？」

「…いやいや、今更家に盗撮用のカメラがあっても驚かないっすよ」

「いやいやいや、驚けよ！てか諦めてんのかよ！？」

「…大丈夫。自分は気にしないっすから」

「気にしろよ！？」

いや、考えてもみてくださいっす。この天才ハッカー少女にかかれば個人情報から人工衛星にハッキングを掛けるなんて朝飯前なんすよ？自分が正義馬鹿にそう説明すると謝られた。…うん。目から涙が出そうっす。

「おはようございま って、どうしたんですか？」

『いえ、人の無力さについて考えてました』

「そ、そうですか…」

…あの、優しい眼で自分を見ないで欲しいんですけど…先生困ってるっすから。

「？…良く分らない」

「……………」

「…ど、どんまい」

…もう、溜息を吐くことしか自分には出来なかつたっす。

* * *

体育でプール開きとなった現在。先程先生の指示により自由時間となつた…のだが。

「なあ、俺と勝負しないか？」

「ん？いや面倒くさいから遠慮するっす」

「ええー…いいじゃん。やろっぜ？」

や せい の や ま と が し ょ う ぶ を し か け
て き た ！ ！

今ある選択肢は

・ た た か う

・ に げ る

・ ほ う ち

・ み が わ り の じ ゅ つ

「むう…あ、じゃあ雪に勝つたら考えてもいいっすよ？」

「いや、雪の意見は無視か？」

「雪…もし大和に勝てたら好きな食べ物奢るっすよ。大和が」

「いや、俺かよ！？そこはお前じゃねエのか！？」

いやいや、勝負してないのに奢るとか…馬鹿っすか？

それに雪もヤル気だしてるみたいっすよ？

「…なんか酷い事言われた様な…で、雪はそれでいいんだな？」

「…ハーゲンダッツ1年分」

「すいませえん！やつぱはこの子キャンセル出来ますう！？」

「アハハハ…無理っすね！」

「笑顔がムカつく!!」

まあまあ…それよりも位置についてほしいっすよ。

そう窘めるとため息を吐きながらプールの飛び込み台に乗って手首足首を回し始めた。

雪の方は先程から微動だにしないで飛び込み台に立っている。

「さて…用意はいいっすか？」

「おう！」

「…いい」

「では…よい、どん！」

バツ！

ドガツ！

ドボンツ!!

…は？え？あ、いや…雪さん？何やってんすか？

ええっと、今の説明すると、大和が飛びだすと同時に雪が大和の方へ跳び蹴りを放ち、大和が吹き飛び水面に叩きつけられる。いやあ…あの、正直試合無効じゃね？

「ゴホゴホツ！て、テメエ！いきなり何しやがる!？」

「…ハーゲンダッツ2年分」

「増えてる!?!じゃなくて!?!って待てコラ!!」

「…ハーゲンダッツ4年分」

「3年分は何処にいったし!?!?ってもう折り返しかよ、チクシヨー!?!」

…とかいいつつも大和も折り返してますからね？ツツコみながらも進むとか何者だし！つとまあ、そんなことは置いといて…結果的に言つと2人は同着。どちらもしめた様でお互いを称え合ってたっす。

これにて1件落着、

「…そう言えば、お前よくも俺に跳び蹴りしてくれたなあ！」

「…事実無根。ウソ、ダメ、絶対」

「テムエ…！じゃあもつかい勝負だ…！俺が勝ったら謝れ…！」

「…私が勝てばハーゲンダッツ5年分」

「いいねエ！やってやるよ…！」

「…私の力を見せてあげる」

…つかね？あ、あと大和。賭けるモノが釣り合っていないっすよ！
そう思いつつ、自分はレース開始の声を上げたのだった…。

あ、自分きゅじゅつです。(前書き)

少し更新が遅れてしまいました。

あ、自分きゅじゅじゅす。

AM:80.00

「これでよし…えーと、あとやる事は…」

散らかっていた漫画や本、目覚まし代わの罨や鈍器をクローゼットの中に詰め込み周りを見渡す。

…うん。特にないっすね。

幸いにも両親と姉は仕事に言っている為、手を煩わせることは無かった。それと同時に、どれだけ両親と姉の存在が濃いかが解ったのだった。

AM:10.00

場所は移動しリビングでくつろいでいた時、インターホンが鳴る。それに気づいた自分は座っていたソファから立ち上がり玄関に行き扉を開ける。

「よっ！今日も今日とていい人助け日和だな！」

「…おはよう。これ」

「おはようっす。あ、お菓子っすか？どうも」

「俺からもあるぜ？」

「はいはい了解っす。自分はお茶を用意するから2人は部屋に入ってきてくださいっす」

『お邪魔します』

2人が自分の部屋に入ったことを確認して、リビングに移動する。

「ええっと…あつたつすね」

冷蔵庫から麦茶のペットボトルを取り出し、あらかじめ置いていたコップに麦茶を注ぐ。

そしておぼんに何も入っていない深皿を乗せ自分の部屋に向かった。

「ん？やつと来たか」

「……………」

「お待たせつす。大和、雪、勉強道具を少し退かして欲しいつす」

「おお、悪い」

「……………」

部屋では大和と雪が勉強をしていたが自分が来たことで中断し、深皿とコップが置けるスペースを作ってくれる。

机の真ん中に置かれた深皿に大和と雪が持参してきたお菓子を投入する。

「んじゃあ、和真が来たことだし早速勉強を再開するか」

「そうつす」

「…うん」

自分は勉強机から教科書とノートを取り出し大和の対面に座る。因みに自分らの配置は右側から大和、自分、雪となっている。

AM:12:00

「……………」

「……………」

「……………」

カリカリとシャーペンを走らせ黙々と勉強する中、目の前で何やら問題に行き詰っている大和に首を傾げる。すると大和はこっちを見て、何でもないと苦笑しながら問題に取り掛かったので自分も気にせず問題に取り掛かった。

「うう…！」

「……………」

「……………」

沈黙が支配する中、またも唸り声をあげながら頭を掻く大和に頭を上げ視線を送る。今度は雪も気になるらしく視線を送った。

「…わ、悪い。大丈夫だから」

「…そうっすか？」

「…静かにしてほしい」

頬を掻き照れた様に謝る大和に顔を歪めながら非難し、また問題に取り掛かった雪を見て自分も問題に取り掛かった。

「ううう…！」

「…大和、何が解けないんすか？」

「…はあ」

頭を抱えて唸る大和にいい加減痺れを切らし、大和の詰まっている問題を見る。

大和の様子に流石の雪も無関心な態度を取り続ける事は無理だったのか呆れた目線で大和を見る。

「これはっすね…」

「ほうほう…んじゃあ、これはこうか」

「…これはこの公式を当てはめる」

「ううむ…成程な」

問題に詰まっている部分をヒントを与える事で手助けしていき、最終的に問題を全部解けるまで解らない所はヒントを出していった。

「…これで最後の問題っすね」

【次の式を解き展開しなさい。アクセラレータ+ラストオーダー】
？】

「ええつと…【アクセラレータ+ラストオーダー】アクセロリータか？」

「…それを展開する」

「おう…【アクセラレータ】意外といい奴】つと。よし、終わったぜ！！」

「お疲れ様っす」

「…お疲れ」

大和は腕を伸ばして痺れを抜き、自分と雪は勉強道具を片付ける。

「ああ…もう5時か」

「あれ？もうそんな時間っすか…どうせなら晩御飯食べていくっすか？」

「…いいの？」

「勿論っすよ」

自分の言葉を聞いた2人から笑顔で頼まれ、その日は一緒に晩御飯

を食べて解散したのだった。

あ、自分きゅじゅっす。(後書き)

最後の問題は某笑顔動画のアフレコ動画から抜粋。

あ、自分おしごとつす。

日常…それは案外脆くちよつとした出来事で崩れてしまう幻の籠。

だが案外幻の籠は思いの他に頑丈で崩れにくい。矛盾している？あ、そうだ。日常は常に矛盾している。だが、それが何だ？矛盾しているからなんだ？そんな矛盾など当たり前だと受け入れてこそ…真の日常とやらが味わえるのだ。そこんところどう思う？和真

「…とりあえず、早急に厨二病を直すことをお勧めするつすよ。てか変なモノローグから始めないで欲しいっす」

「これは失敬。行き成りすぎて読者が困ってしまうか…全く難儀なものだ」

「アンタが一番難儀つすよ！！というか、メタ発言禁止つす！！」

「ハツハツハ！だからどうしたのだ！！」

「あー！もうっ！誰かこの人の通訳して欲しいっすよ！！」

「まあまあ…落ち着けて」

「ムカつくッ！その優しい目線がムカつくッ！！滅茶苦茶ぶん殴りたいっす！！」

現在の時刻は深夜の0時。場所は人気の少ない港の倉庫。何故こんな時間こんな場所にいいのかと言うと…。

「所で始める前に依頼の再確認だが…大金持ちのお嬢様が変態達の手によって奪われたので、取り返してくれとのことだ」

「…了解つす」

我らが家族は暗殺者なので裏の仕事が舞い込んでくる。その為現在の様に公には出来ない仕事を日々こなすのだ。因みに今日は厨二病患者な姉とお仕事つす。

「んじゃあ…早速始めるか」
「了解つす」

瞬間足に電気を集め纏わす。それと同時に地面を駆け出し高速で目的地の倉庫を目指す。僅か数分で目的地周辺に到着。近くの倉庫の壁に身を隠し目的の倉庫の周りを観察する。

「数は…5人。内部は…10人かな」
「…了解つす」

姉が隣で「白眼ッ！」とか言ってるのを無視して情報を収集。無論「お、俺の右手が疼く…っ！…」とか言いつつ左手を押さえているのに対してツッコミはしない。調子に乗るから。

「んじゃあ、行くつすよ」
「…フンッ！奴ら如きに我の本気を見せる訳にはッ！」

そんな言葉は無視して高速で走り、自分の存在に気付いた5人の護衛達を片っ端から倒していく。そして倒れると同時に扉に跳び蹴りをかまし吹き飛ばす。

「な、なんだ!？」
「撃てッ！」
「甘いつすよ!！」

銃口と引き金を引くタイミングを見て弾の軌道を読み避ける。そして近くで驚いて固まった奴から順に顔面、喉元、鳩尾、ティンティンを蹴り飛ばし無効化していき、最終的に捕まったお嬢様を盾にして待ち構えている男だけとなった。

「…お前何者だ？」

「……………」

「…ヒック…ウウ…」

銃口をお嬢様に向け質問してくる男を見据えつつ自然体を保つ自分。お嬢様？泣いちゃってるけど無視ですよ無視。興味ないし。まあ、そんな感じで数分間対峙していたが、突如幕は降りた。

「…なん…だと…？」

「…現実でそれを言える奴がいたんすね」

「…ッ!？」

男とは別の意味で驚く自分とお嬢様。まあ、銃を突き付けていた男が突然倒れたら驚くか…とお嬢様を見ながら思う。男？多分死んでないっすよ。麻酔弾っばいっすから。

「…終了っすね」

「…ミッションコンプリート」

「えつと…？」

後ろからスナイパーライフルを持ちながら来た姉の登場に困った表情をするお嬢様。

「んじゃ、さつさと報告をするっすかね」

「そうだな…私は早く深夜アニメを見なければいけないし」

「……………」

携帯を開き番号をプッシュして数コール後に依頼主に報告する。そして少ししてからお嬢様に電話を渡す。

「えつと…?」

「君のお父さんからつす。心配を掛けたみたいだから声を聞かせてあげてくださいっす」

「あ、はい…。お、お父様?お電話変わりました…。はい、はい…御無事です。ご迷惑をお掛けしました」

「…和真。どうやらもう此方に向かっているらしい」

「そうっすか…んじゃあ、お嬢様の迎えが来るまで此处で休んでるっすよ」

「…そうか。なら私も待つとしよう」

「アニメはいいんすか?」

「…携帯で見るから大丈夫だ」

「…その執念は尊敬するっすよ」

携帯を開きだした姉を呆れた目で見てみると、電話が終わったのかお嬢様が自分に携帯を渡してきた。

「あ、あの…た、助けていただき有難う御座いました!」

「…いえ、自分達は仕事っすからね」

「そ、それでも…!有難う御座いました!あ、あの…も、もしよければ…そ、そのお…お、お礼をさせていたただきたいんですけど!」

「…いえ、自分達は仕事っすから気にしないでください」

「だ、ダメですか…?」

「……………」

上目使いと涙目で言うてくるお嬢様から目を逸らすと姉と視線が合った。ニヤニヤしている。ぶん殴りたい…!

「…失礼ですがお嬢様?この仕事は報酬金だけの関係で成り立っていますのでお礼などは受け取れないんです。申し訳ありませんが、気持ちだけで貰うという形で…」

「…そ、そうですか…申し訳ありませんでした」

落ち込む様に顔を下げのお嬢様を見て胸が痛くなったが暗殺者との関係上仕方がない事だと割り切る。決して隣で姉がニヤニヤしているので賛成したくなかったとか関係ないっすよ？ほんとっすよ？

「つと…そろそろっすね」

「…え？」

お嬢様が首をかがているのを傍目に扉の方を見る。すると同時に車が見れ、扉が開き護衛と共に1人の男が降りてきた。

「お、おお…！無事だったか！」

「お、お父様…！！」

親子の感動の再会を見て姉と視線を合わす。姉は頷き前に出た。

「…感動の再会の所、水を差してすみませんが、我々はこれで帰りますので…報酬は忘れずに」

「…ああ、有り難う。必ずや約束を果たそう」

確認することが終わったので、その場を去っていく。後ろで何か言いたげなお嬢様の視線を残して…。

あ、自分けんかつす。

「オラア！このクラスに相良さからつつう奴がいるらしいが…どいつだ？」

時刻は昼休み。場所は教室。現状は昼御飯中…なのだが残念ながら不良っぽい奴に絡まれそうっす。

「あの一？相良なら屋上行きましたか？」

「…毎日屋上行ってる」

「そうだなー、アイツ暇人ばいし」

「…テメエら誰だ？まあ、誰でもいいか。相良つつう奴は屋上なんだな？おい、行くぞ」

真っ赤な嘘を信じた不良＋（舎弟達）が教室に去って行ったのを傍目で見つつ食事を開始する。うん。今日のサンドイッチはおいしいっすね。

「……………」

「…なんすか？その何か言いたげな目は…」

いや、自分らを巻き込むなよ？的な目線ってことは解るんすけどね…巻き込んで対処できそうっすよ。このクラス。そう思いながら食事を終え談笑していると…又も不良さん達が現れる。

「…テメエら、相良居なかったじゃねエか？」

「ええー。逆恨みっすか？てか、良く考えてみればトイレ行ってんじゃないっすかね？」

「…食後はトイレに行く」

「一回トイレ見て回ればいいんじゃないっすかね？」

「……成程な。おい、行くぞ」

又も騙された哀れな不良＋（舎弟達）。てかわざわざ自分で行くなんて律儀な人っすね。舎弟の意味あるんすか？あ、リンチする為か。

「…てか、あの人馬鹿だな」

『間違いなく』

「…クラスで肯定しなくてもいいんじゃない？」

苦笑している大和はジュースを飲みながら、思い出したように自分の顔を見る。

「そういえば、ウチの学校の風紀委員会で最強風紀委員長いたじゃんか？あの人が解決すればいいんじゃない？」

「…現在風紀委員長及び風紀委員は校内で起きているカツアゲについて白熱的ディスカッションをしている」

「…その間に風紀取り締まれば尚いいんすけどね」

【最強風紀委員長】…そう言えば一回だけその人に勧誘された様な…まあ断ったんすけどね。家とかの事情で。そんなこんなで談笑しているとまたまた不良さんが現れた。

「…そのテメエ。よくも散々騙しやがったな？テメエが相良つつうらしいじゃねえか」

「…いや、普通事前に調べませんか？相手が判らなかつたら探し様ないつすよ？」

『確かに…』

「テメエらはどっちの味方だ！！」

『す、すいません！！』

「…賑やか」

「…いや、五月蠅いだけだろ」

不良たちの会話に呆れつつため息を吐く。その態度が気に入らなかつたのか自分の襟を掴み顔を迫らせてくる。

「…おい。あんまり舐めてつと痛い目にあうぜ？」

「…ふむ。痛い目つすか？例えば…こんな風に？」

「グフツ！」

「ついでに言えば…こんな風にも？」

「ガツ！？」

「さらにさらに言えば…つてもういいつすかね？」

「…カハツ！」

始めに鳩尾膝蹴り、襟を掴んでいた力が緩んだのを感じ即座に顎膝蹴りを…そして最後によるついた所を回し蹴りで吹き飛ばす。全く制服が乱れたら風紀委員長に怒られるんすからやめてほしいつすよ。そう愚痴りながら制服を正し、地面に倒れてなお鋭い眼光を自分に向ける不良に一言。

「…今更つすけど、何の用つすか？」

『うわぁー、本当に今更だ！』

「…クソツ！なにしやがる！」

「いや、だから今更つて言ったじゃないつすか。てか何で棒読み？」

クラスメイトのツツコミにツツコミをする自分に呆れた目で見てくる大和と雪。なんで？

「…いや、不良を放っている上にスルーかよ」

「…流石にこれは可哀想」

『そーだそーだ!』

「ちよつと君たち黙ってて!? クラスメイトと舎弟の違い判んなくなるっすから!」

「ちなみに今のは舎弟達な?」

「メタ禁止」

「…はあ、で? なんの用で来たんですか?」

「…決まってるんだろ。仲間が倒されたからだよ」

「は? 仲間?」

不良の言葉に首を傾げる大和と雪。ちなみに自分も傾げてる。

「お前ら…数日前にある三人組に突然殴られたっつうから敵取りに来たんだよ。それお前らだろ?」

「ああ…そりゃカツアゲの現場見れば助けるのは当たり前っすよ」

「…何?」

「え? いや、だから助けるのは「いや、その前」…カツアゲの現場を見れば…ってあれ? どうしたっすか?」

「…相良。そりゃ、マジで言ってるのか?」

「はい? そりゃそうっすよ。嘘ついてどうすんですか」

「……………」

自分の言葉に絶句している不良。自分を含めてクラスの皆は首を傾げ様子を見守る。

「……………」

「…はい?」

「…ぶち殺す!」

『え!?!?』

「テメエら行くぞ! アイツ等嘘つきやがって…何が「授業をサボって校舎裏にいたら理由もなしに突然殴られた」だ…マジで締め上げ

る」

『ま、待ってください!』

黒いオーラを纏い教室を出て行く不良に追いかけて行く舎弟達を眺めてポツリと呟く。

「…嵐が去ったか」

『……………』

「いや、だから何すか?その「お前は嵐の元凶だろうが」的な目線は…」

『+授業をエスケープ』

「それはアンタ達の性っすよ!?!」

「へえー、相良っち。授業サボったん?」

「いや、まあサボりましたが…え?」

突然聞こえた声の方を主ギギギとブリキのおもちやみたくに首を後ろに回す自分の目に映ったのは…、

「あははー、どないしたん?そんな化け物見た様な顔してー?」

「あ、あは…アハハハ、ほ、ほんとどうしたんすかね?てか何でいるんすかね?いや、マジなんで?」

「…おい、汗凄いぞ。大丈夫か?」

「…顔真っ青」

「もう、ホンマ毎回おもろいなー?相良っちは」

そう言っつて笑顔で笑う女性 あいはら みなも 相原水面を見て冷汗が出て来る。理由?

そんなの簡単 この人とこの人の役職がヤバいのだ。

「あ、相原さんはどうしてこの教室に…?」

「あー、そやそや。ウチ、仕事でこの教室来てん」

「へ、へえ〜。ちなみにどんな理由でござりますか？」

「言葉変になつとるでー？理由としては風紀委員はディスカッションに熱中しとるから見回りが疎かになつとるやろうと思つてな？代わりにウチ等【生徒会執行部】が見回りしとるんよー」

そのお蔭で仕事が出来そうやわー。と笑顔で言う相原さんに冷汗を流して愛想笑い。

【生徒会執行部】…それは学園に置いて先生以上校長以下の権力を持つ者達の集まり。そして生徒会執行部になれる人間の特性として挙げられるのが【絶対強者】というもの。【絶対強者】とは名の通り【何事にも強者で在れ】という謎の信条を忠実に守り【知識】【戦闘】に置いて某魚箱の異常な会長並みに凄い人達なのである。ちなみに冷汗を流している自分は生徒会執行部の人たちに知識、戦闘に置いての勝負で勝てたことはありません。

「ほな、【相良和真】【二宮大和】【霧島雪】。君たちを授業放棄と見做し執行いたします」

「えええええ！？ちよ、待つてくださいよ！自分らはカツアゲ防いだんすよ！？」

「そ、そうだよ！良い事したんだから見逃してくれないか！？」

「…生徒を守った！」

「うーん…そやな。でも相良っちは【助けて当然】って言つてたし。二宮っちも首を縦に振つて同意してたやろ？霧島っちの守つたつて言つのは正直褒めてあげたいけど、相手を傷つけたら本末転倒やわ。それに、授業放棄と助けたんは別や。それはそれ、これはこれっちゅうことやな」

何時の間にか持っていた手錠で自分らを拘束して最後の足掻きを正論で仕留めていく。そんな自分らを可哀想な目で見てくるクラスメイト。…ええい！見るな！

「安心し、反省文を原稿用紙10枚程度書くだけやから」
「全く安心出来ねえつすよ!?!」

「10枚って何?多すぎるだろ!?!馬鹿か!」

「せめて3枚」

「んー、二宮っちの暴言に傷ついたわー。3人に+5枚」

「なんで自分らも!?!」

「…理不尽ッ!」

「世の中理不尽だらけやでー?」

笑顔で自分らの手錠を掴みそう言う相原さんに絶望する自分達。クラスメイトは哀れそうに見てくる。だからみるな!

「んじゃま、生徒会執行します」

『いつてらっしやい』

「……………」

助けようともしない薄情なクラスメイトに見送られ自分らは教室を後にしたのだった…。

その後の相良達の会話

「残りの枚数あと5枚ツ!?!」

「大和の性…死ねばいい死ねばいい死ねばいい死ねばいい死ねばいい」

「うわぁ…空が青いな…」

「そんな、現実逃避しとらんとキリキリ書きなはれ!それと今は青空ちやう。オレンジや」

「それ夕暮れじゃね!?!」

「そんなん言ってる場合かいな?ええ加減殴るで?」

『すいませんでした!』

今日も今日とて平和であった…。

あ、自分けいかくつす。

季節は夏。我が高校は夏休みに突入した。

「…暑いっす」

「ん〜？どうした少年。姉に欲情か？」

「いや、しないっすよ。下着姿のアバズ」……………」美しいお姉さまに欲情なんか」

「そうかそうか…熱いならアイスでも食べればいいじゃない」

無言で八卦六十四掌の構えをする姉に土下座して即座に台詞を変える。そして姉の言う通りに冷凍庫から残り1本のアイス棒を銜える。

「少年…もしアイスが無くなっていたら買ってきてくれたまえ？」

「…そうっすね。じゃあ、無くなったら買ってくるっす」

「……………」

「……………」

「…暇だねー」

「…そうっすねー」

睨み合いの末、買い物権は引き分けとなった。だらけた格好でテレビを見ているとインターホンが鳴る。瞬間に姉を睨み姉は自分を睨む。

「…行きたまえ」

「…嫌っす」

「……………私は下着姿だぞ？」

「服着ればいいっす」

「時間がかかるだろ？」

「能力使えばいいですよ」

「…しょうがない。ここは一肌脱いでやるっ」

「文字通り脱がないでくださいよ？」

「…チツ」

「舌打ち!？」

ダルそうな表情と共に舌打ちする姉に驚きつつ早くいくように催促する。

「しょうがない…【纏乃主：神崎・H・アリア】」

「…何故そのチョイス」

「アニメがやってるからよ。その位解りなさいよね!この馬鹿犬!」

「…リアル釘宮ボイスっすか」

「全く…ピンポンピンポン五月蠅いわ!早くいきなさい!」

「いや、アンタが行くって言ったんでしょ!？」

自分の言葉に膨れっ面でフンツ!と言って玄関に向かってドストドスと音を鳴らしながら歩く変身した姉(容姿・格好・声全てアリア)に呆れた目線を送っておく。

「すいませーん。あ、開いっ、ピンポンピンポンうるちゃい!全く何時だと思ってるのよ!」ウエ!？誰!？」

「…緋弾のアリア。二次元からの脱出？」

「アンタ達!お腹空いたからもまん買ってきなさい!」

「初対面に命令!？てか、もまんって何!？」

「…三丁目に売ってた」

「マジで!？初耳なんだけど!？」

「あーもう!五月蠅い!さっさと行って来なさい!じゃないと風穴開けるわよ!」

「なんで銃持つてんだ！？危ないだろ！！」

「…コルト・ガバメント」

「何故解つたし！？」

あー…玄関でカオスな状況が、と頂垂れながら言い争っている玄関に向かう。

「そろそろ止めるっすよ姉さん」

「しょうがないわね…「ちよつと待て！？」何よ？」

「姉さんって何？この人お前の姉さんなの？」

「正確には姉さんが変身した状態っすけどね」

「…どういう事だ？」

首を傾げている大和と雪を無視して姉さんに視線を送る。いや、ア
ンタは首を傾げんな。解るでしょ。

「全く…【解徐】。これでいいか？少年」

「…服を着てくれたらなおいいっす」

「…誰？」

下着姿の姉さんを見て首を傾げる雪に何故か踏ん反り変える姉。鼻
血を出して倒れた大和に頭に手を置き溜息を吐く自分。…まさしく
カオスっす。

* * *

「で、この美人なお姉さんがお前の姉だと？」

「そうつすよ…美人かは判らないっすけどね」

「…胸エ」

「…ふぶん。羨ましいかい？少女」

「…和真、胸ある方がいい？」
「いや、特に気にしないっすけど」
「…そう」

自分の答えに満足気な表情をする雪から視線を外すと姉と大和がニヤニヤとしていた。殴りたい。

「…大和殿。我が弟はモテておりますな？学校でも？」
「…そうですね。上位には入っておりますよ輪廻殿」
「ホッホッホ。成程…やりますな」
「アツハツハ。本当…憎たらしいぐらいにツ！！」
「…そう言えば雪、何でウチに来たんすか？」

大和の憎しみが籠った眼から視線を逸らし、雪に質問する。

「…これ」
「雪と和真の家族計画…？」
「…間違えた、こつち」
「待つて！さっきのは何だったんすか！？」
「…今年の夏は海がオススメ」
「無視っすか！？」

雪の後ろにある紙が気になるが雪は絶対に渡さないとばかりに綺麗に畳んで守っている。…ちくせう。

「…なら今年は何処がオススメっすか？」
「…此処がオススメ」
「俺としては此処も捨てがたいかな？」
「ふむ…なんだか面白そうな話をしているな」

姉に大和が加わり今年の夏休みの計画を立てていくのだった。

あ、自分りよじつす。

時は進み、今現在は旅館の入り口。

「ほお…なかなかどうして良い所じゃないか」

「…えっへん」

「いや、何故に姉さんまで？」

「まあいいんじゃない？」

高級そうな敷居と完成された動きで迎えた仲居さんを見て感嘆の声をあげる姉さんに場所を選んだ雪が胸を張る。その2人を見て嘆息をつく自分に苦笑気味に肩に手を置いてくる大和。そんな4人を見て笑顔で迎えてくれる女将さんに挨拶を交わす。

「ようこそ我が旅館【花乃湯】において下さいました。あ、お荷物はお預かりします。では、部屋にご案内させて頂きます」

正座から立ち上がり笑顔で歩いていく女将さんに自分らは会話をしながら歩いていく。そして部屋に案内され「ごゆっくりどうぞ」と言葉を置いて去って行った女将さんを傍目で見つつ部屋の大きな窓から外を眺める。…しばらくそうしていると、ふと袖が引っ張られたので横を見ると雪がこちらを見ていた。

「…散策」

「ああ、了解つす」

「……………」

「お〜い、戯れている場合か」

「全く…ナデポだと？何処で習得したのやら」

教えてくれた雪にお礼にと頭を撫でる。すると目を細めて気持ちよさそうな表情をする雪に癒される自分：そんな自分に呆れた様な視線を送ってくる2人。いや、1名は意味不明だが。

「んじゃあ、最初はどこいくつすか？」

「…商店街」

「おお！困ってる人いないかな？」

「フフフツ…腕が鳴るな」

姉の意味不明な発言に内心ツッコみたい衝動に駆られたが深呼吸して放置した。姉が不満そうな視線を寄こすが無視する。だってツッコんだら負けな気がするから。

* * *

「獲物が取れないだと？ならばその幻想をぶち殺す！」

「…そげぶ？」

「まあ、幻想は殺せてないっすけどね」

「ハハハ…」

姉さんがゲーセンでUFOキャッチャー相手に格闘しているのを周りで眺めつつ乾いた笑い声をだす大和に声をかける。

「ん？どうした？」

「いや、逆にどうしたっすか？」

「いや？別に、なんで遠くの旅館に来てまでゲーセンいるんだよ。とか思っていないぞ？」

「そうっすね。しかも保護者名目で付いてきた姉さんが一番はしゃいでるっすから、どうしようもないっすもんね」

「…苦労しているんだな」

「…フフツ。慣れてるっすよ」

優しい微笑みを自分に寄越す大和に自分は遠くを見て現実逃避。ま
あ一瞬で元に戻ったのだが…。

「何を黄昏ている？少年共」

「…どうしたの？」

『いえ何にも』

UFOキャッチャーが終わったらしい2人に声を揃えて返事をする。
それよりも姉さん？その血だらけな赤熊のぬいぐるみは何？それに
2000円使ってたの？馬鹿なの？死ぬの？…殴られた。痛いっす。

「全く…この【血濡れの熊さん アナタの血の色何色だ？】の魅
力が判らんのか？」

「いや、どんな名前ですか…？それに血の色が赤黒って何すか？ど
んどけクオリティー高いんすか」

「…この色はデフォ。リアルに近づける為に頑張るのがこの会社の
モットー」

「…なあ、使用着色の所に【人間の血】とか書かれてるんだが冗談
だよな？色が似てるだけだよな？」

大和の言葉に笑いながらそりやそうでしょと言う姉さんと雪。すい
ません、目が笑ってないんですけど本当に冗談っすよね？

「さて、そんなことより旅館に戻ろうか？そろそろ夕食の準備がさ
れているだろうっからな」

「…楽しみ」

「…ああ、今日の肉料理食べれないかもしれんな」

「ぬいぐるみの性ですね、わかります」

今日の夕食について語っている2人の女性の後ろで疲労の色を濃くしている大和に苦笑しながらツツコむ。
さて…今日の夕食と露天風呂で疲れを癒すかな？

今日も今日とていい休日日和であったとさ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3201s/>

あ、自分ちーとっす。

2011年10月6日18時47分発行